
ガラスの仮面

宮沢 優衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの仮面

【Nコード】

N8189B

【作者名】

宮沢 優衣

【あらすじ】

二人の大学生が創りだす恋愛ファンタジー小説です。

（前書き）

登場する人物名は、全て架空の人物です。

- - - - - 一緒だよ。

ずっと

3月9日 優、祥子

- - - - - 学校の校舎に刻まれた文字、これは二人の未来、二人の夢である。

キンコンカーンコン。

終業のチャイムが鳴る。

クラスの中はざわめきが残るまま、帰宅の用意をする学生が大半だ。

その中に、マイペースにしている二人、速水優と金谷祥子がいた。

速水優は、成績優秀、運動神経良しの誰からも好かれる人物だった。

そして、その優よりも、抜きんでた才能を持つ、金谷祥子は、いつもマイペースに行動していた。終業と同時に、予習を始めたかと思えば、ものの3分で読書をするといった、どこか天然を思わせるような人物だった。

そして今日も、予習をしたかと思えば、鞆をあさり、パンを食べ始めたのだ。周りから見たら、帰ってからご飯を食べれば良いのにと思われるような行動だ。

「祥子、今日も行くんだろ？いつもの喫茶店に」

そして、話し掛けてきたのは、速水優だった。

「うん！もちろん！あそこのカフェオレ大好きだもん」

この二人は、放課後になると、いつも喫茶店に寄っていたのだ。

「よし、じゃ行くぞ。」

そして、他愛無い話をしながら喫茶店に向かう途中、偶然ネコが通りかかった。

「あつ、ネコ！可愛いなあ、私もネコみたいってよく言われるし、前世はネコだったのかなあ。」

「まあ、マイペースな部分はネコだったんじゃないか？」

「でも、ネコってマイペースって言われてるけど、ネコのペースと人間のペースって比べられないと思う。」

「まあ、そりゃあな。あ、着いたぞ。」

珈琲の香が漂ってくることに気付くと、二人は足早に喫茶店へと向かった。

「こんにちは。」

「いらつしゃ…」

なんだお前たちか。お客様かと思っただぜ」

「俺たちだつて一応客だよ。」

「あー、いつもので良いのか？」

「うん！カフェオレとコーヒーね！」

「はいよ、ちょっと待っててな。」

常連客となっていた、優と祥子は、カウンター席に座り、マスターの作業を見ていた。

「ふう〜。やっぱりここが一番落ち着くなあ。」

「優もそう思う？私も落ち着くなって思うんだ〜。」

珈琲豆の芳醇な香りがする所は、二人にとって落ち着く場所になっていたのである。

「そういえば祥子に相談したいことあるんだけど、聞いてくれる？」

「ん？なにに？恋バナってヤツ？」

「…。祥子にだけは恋の相談しないよ。。。だって、いつも俺のタイプじゃないやつ紹介するしさ。就職をどうするかって相談だよ。」

「なあんだ。つまんないの。でも、優の就職って内定取れたんでしょ？」

「まあね。でも、正直俺がやっていけるかどうか、不安なんだ。」

「不安っていつでも、優が就職したいって決めた所に決まったんでしょ？何が不安なの？」

「ああ、自分が本当にやりたいことって別にあったんじゃないか、飯に内定取れたところがやりたいことだったとしても、自分を作ってしまったってから、そのままいたら、本当の自分を見失うんじゃないかって思うんだ。」

「ふむふむ、要するに、自分のやりたいことがはっきりしてないん

だね。でもさ、やる前から分かんないでしょ？本当にやりたいのか、やりたくないのかなんて事は、実際に働いてから考えることじゃない？」

その時、マスターがカウンター席に座る二人の前に、いつものカフェオレとコーヒーを置いた。

「なんだ？仕事の悩みか？」

「そうなの。内定取れたところがやりたいことかどうか不安なんだって。」

「ふん、やる前から何弱気になってるんだか。やるんならやれ。やりたくないなら、やりたいことを考える。俺に言えるのはそれくらいだ。」

そう言い残して、マスターは洗い残した食器を洗いに奥に行ったのだった。

「そうそう、マスターの言う通りだよ。」

「まあそうだな。やる前から判断しても仕方ないもんな。やってみてからどうなるか考えることにするよ、ありがとう。祥子、マスター。」

「どういたしまして、それに、約束したじゃない。。。」「消え入りそうな声で祥子は俯きながらそう言った。

「ん？どうした？」

「うっん、美味しいなって、このカフェオレ。」

「ああ、いつもと変わらない味だけど、それがすごいんだよな。」

「うん。冷めてても美味しい。」

「ああ。」

つて、結構長居しちゃったな。相談も出来たし、そろそろ帰ろうか。

「

「ん、そうだね。じゃマスター、お会計お願いします。」

「おお、もう帰るのか、どうせ明日も来るんだろ？今日はサービスだ、百円にしてやるよ。」

「えっ、良いのマスター？」

「常連客だからな。たまには良いだろ？」

「やったあ、どうせだから甘えちゃおうよ、ね？」

「そうだな。ありがとう、マスター！」

二人は、マスターにお礼を言つて、店の外に出た。

外は日が沈み、夜の風と共に、闇が迫ってきていた。

「そろそろ暗くなってきたなあ、今日は遅いから送るよ。」

「ありがとう。今日は寄りたい所あるんだけど、いい？」

「ああ、行くよ。」

そして、了解を得た祥子は、待ちきれなかったのか、駅の方へ歩き

だしていた。それを追うように、優も後からついていった。

電車に乗り込んだ二人は、喫茶店での余韻を思い出しつつ、目的の駅に向かっていった。

「何を見ても驚かない？」

「まあ、大抵のものならな。」

その事を確認すると、安心したような笑みを浮かべ、それから一言も発しなかった。

目的の駅の手前で、祥子は立ち上がり、優を促した。

「そろそろよ。」

「え？ここは…。」

駅に到着した電車は、二人だけを降ろし、また次の駅に向かった。

「そう、今日はここに来たかったの。覚えてる？」

「あ、えっと…。約束が…。」

「そう、約束よ。ここは私達の約束の場所よ」

そこは、学校。

二人が通っていた、高等学校だった。

その校舎の二人だけの秘密、そして、そこに刻まれた文字、刻まれた未来を。

「…そうだ。。ここは俺たちの約束の場所――。」

「そうよ、優が言いだしたのよ？二人でここに未来を、夢を刻もうって。思い出した？」

そう、そこに刻まれていた文字、それは、二人が描いた未来、夢だったのだ。

「ああ、全てを思い出したよ。何で俺は忘れてたんだ。」

「忘れていたんじゃないわ。ただ私がそうさせただけ。高校までは、優の方が成績良かったのよ？それが、今は、私の方が成績は上。それで、優は勉強をしたのよ。大事な約束を忘れるくらい必死になつてね」

「ああ、そうだ。俺は祥子より成績が上だった。だけど、高校卒業の日に俺たちは――。」

「そうよ、名前と性別、姿形全てを交換したのよ。」

「そして、その期限が、今日、3月9日って訳だ。」

「…。私たちは、四年間お互いにお互いを知った。」

「体を交換してまでな。」

「だけど、それも、今日の七時でおしまい。全て元通りよ。」

「ああ、分かっている、あと1分だな。」

「ええ。今までありがとう。そして、さようなら。四年間楽しかつ

たわ。」

「そうだな。そろそろだ。ありがとう。俺も楽しかったよ。」

キンコーンカーンコーン

不意にチャイムが鳴った。

二人は、二人だけの秘密を四年間、この場所に刻むことで未来を、生きていた。そして、二人は、刻まれていた文字……。未来になつていた。

- - - - -いつまでも一緒だよ。

ずっと気持ちは変わらないよ。

大好きです。

3月9日

優、祥子

- - - - -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8189b/>

ガラスの仮面

2011年1月30日02時44分発行